
異世界の俺の生きる場所

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の俺の生きる場所

【Nコード】

N0087Z

【作者名】

—

【あらすじ】

俺の名前は岩元昌也。高校2年生だ。ある日、金髪の美女に、異世界に来ないかと誘われる。冗談だと思っていったら本当に異世界。来ちゃったもんはしょうがないから、ここで過ごそう。魔物？魔術？すげー、俺も使ってみて！。

主人公最強ではありません。また、主人公がハーレムを作ることもありますのをご了承ください。

いつか題名を変えます

初投稿ですので、誤字脱字、文章の幼さが目立ちますが、お許しください。

0 話（前書き）

これは初投稿作品ですので、温かい目で見守ってくれると嬉しいです。

ものすごい下手ですが、最後まで読んでくれると嬉しいです^^

0 話

俺の名前は岩元昌也。とある学校の高校2年生だ。頭は・・・いい。だが、それも意味はなくなつた。

なぜなら今俺は異世界に来ている。いや、連れてこられたというほうが正しいだろう。

自分も実際何が起つたか理解に苦しむ。辛うじて分かるのは自分が違う世界に来たということだ。

「マサヤ君？」

誰だ？ そうだ、俺をココに連れてきた人だ。

女性で髪は金髪で肩あたりまでの長さだ。そして綺麗だ。

なぜこんなことになっているかというところ、ある日、高校からの帰り道、俺はこの女性に声をかけられた。

「君、違う世界に行つてみない？」

唐突すぎた。3秒ほど頭の整理に使った。日本に金髪の美女がいることも不思議だが、俺はあまり深く考えなかった。冗談だろうと思いつながらその人があまりに綺麗だったので、行けるなら行きたいと答えてしまった。そしたら、

「じゃあ決まりね。あなたに関する記憶はマスターに頼んで、この国から抹消しておくから。」

オイ待て。マジで？

暗い路地にもものすごい力で引き込まれ、金髪が何か唱えると、黒色のどこでも。アに似たものが出てきた。もう逃げれないと思った俺は、その中に・・・入った。

中は真っ白だった。10秒ほど歩くと出口が見えた。出ると、砂漠。そして目の前に20メートルはあるかという門。

俺はただただ口をあけるしかなかった。そんな時、金髪が、

「君、名前は？」

と言う。

「岩元昌也です。」

「聞かない名前ね。あ、違う世界かw」

ふざけてるのか？と思いつつ、名前を聞き返した。

「メアリーよ。」

「すいません、メアリーさん。ここはどこですか？」

「ここはミリシア。私はとある集団の一人でね、今回私はここに依頼で来てるのよ。」

・・・俺なんで呼ばれた？

「今回の依頼はちよつと一人じゃきついから君を連れてきたってわけ。」
なるほど。

「君はみたところ魔力が多そうだったから来てもらったわ。あつ、そつだ、この石に触れて。」

そこには黒い石。俺は手に乗つけた。すると石は、光りだした！という反応はなく、黒いままだった。

ちよwこれ大丈夫w？

「ええ？！多いのは魔力だけ？？でも属性はある・・・」

やばい？これやばい？

ずっとメアリーさんが黙っているの、たまりかねて声をかけた。すると

「君は魔力量が普通の人より多い。けど、魔術を使うのには適していない。」

え、それって結局ダメじゃんよ。メアリーさんよ。

「しょうがない。君には体術を仕込むわ。依頼の期間は2週間。今

から5日間であなたには基礎を教えるとするわ。いいわね？」

その後の説明によると、俺は魔力を具現化する能力が低いらしく、魔力によって、肉体強化するしかないという。だが、そのうち少しは魔術も使えるようになるだろうと言われた。それならいいかなと、承諾した。

とりあえず、町に入ろうといわれたので門を抜け、民宿のようなところに入った。

町は広がった。ものすごい。こんなところで何するんだろ、と思った。

その後、特訓が始まった。最初は魔力を感じるという訓練だった。「神経を集中すると何か流れてる気がしない？こつちの世界なら君は間違いなく感じれるはず。」

右手に神経を集中した。確かに温かいものが流れている気がした。

「あとはイメージしだいよ。それを手全体に広げてみて。」

イメージ・・・してみたがさすがに無理だった。

今日はずっとコレを繰り返えすらしい。

4時間後、ずっと俺はがんばってたのにメアリーさんという風呂に入り、飯を食べ、テレビを見て爆笑している。

クソ野郎、いつか見てろよ？

そんな俺も、魔力を広げられたらしい。力の入り方が違う。

「できたっ！」

「ふーん、じゃ次は足ねー」

足もすでに終わっていた。

常人より少し早いスピードでメアリーさんの前に立った。

「あら、早いわね」

「ちょ、メアリーさん適当じゃないすか？」

「メアリーさん？違うわ、師匠よ。」

どうでもよっっ！！

「まあいいわ、今日はコレでおしまい。明日は本格的に行くわよ。もっと上手くなればここまで・・・ほら！」

ええゝ早すぎゝw

その夜

悔しかったからかメアリーさんが寝たのを確認し、ずーっと、自分で訓練していた。

「あの子、以外にがんばるわね。私も教えるなら私を超えるくらいに育てなきゃね。」

おきていたのかメアリーはこう小声でつぶやいた。

1話

目が覚めた。ああ、そうだ。ここは異世界。もう俺に帰あよびる場所はないんだった。

母さん、何してるかな。父さん、仕事クビになってないかな。

学校の友達、祖父母、親友、前の世界のあるゆるものが頭に浮かんだ。

昨日までは何もなかったのに、今日になってさびしさがこみ上げてきた。

でも、もう遅い。ここで生きるしかないんだ。

そう思いながら、体を起こした。

涙が出てきた。

「マサヤ君、起きた？」

メアリーさん、いや師匠が呼びかけてきた。

とっさに涙を堪え、拭く。そして

「はい、起きてます」

と答える。

もうこうなったらここで生き抜いてやる。

「今日は何やるんですか？」

「ええ、今日は買い物よ」

一瞬で緊張感が抜けた。

だって、本格的つつつたのに買い物だよ？

「まずは服。そして食料、あとはまあ安い武器かな。」

服、あ、学生服やんけw

今更ながらここだと超恥ずかしいw

で、ここは民宿？を出て15分ほどあるくと商店街についた。ここはある程度のものなら何でもそろっているらしい。

まずは服だが、ここでは、ドラ。エの村人のような服が一般的だった。ということ、後は、ご想像にお任せします。

師匠もこんな感じだ。

店の裏を見ると、黒とも濃い青ともいえる物体が動いていた。すぐに居なくなったので、気のせいだろうとあまり深く考えなかった。

「ところで師匠、依頼って何ですか？」

「何言ってるのよ、あなたまだ戦えないじゃない。」

戦うのかいw

食料市場にて・・・

前の世界の食べ物とほとんど同じだった。

俺は師匠の買いい物を見守りながら、何作るんだろうとワクワクしていた。

ここでもさっきの物体を見た。けれどまた気にしなかった。これがあとあと関係してくるとは、昌也は思ってもいなかった。

続いて武器屋。

剣やら杖やら槍やら・・・もう何でも揃っていた。

使えなさそうな枝まであった。

「そうねえ、マサヤ君には体術を極めて欲しいから、この銅い籠手にしようかしら。」

銅は魔力を比較的通しやすいらしい。もっと上質なものもあるがらしいが。

「まあ、今は戦力にもならないし、これにしようか。」
酷い、傷ついたw

「さあ、買うもの買ったし、帰ろうか？」

「はい、そうですね。」

昌也とメアリーは、商店街を後にした。

一方さっきの商店街の裏では
黒っぽい青っぽい物体が増殖していた・・・

そのころ、民宿に戻った二人はこんな話をしていた。

「マサヤ君、私はある集団に所属しているといったでしょ？」

「はい、それが？」

「これから行動を共にする上で知らなきゃいけないこともあると思うの。今から君にはその話をしようと思うわ。」

「分かりました。お願いします。」

「私の名前はメアリー・ティーフ。フィアラルという組織の一人よ。メンバーは私を含めて7人で、剣使い、銃使い、魔術使いとか、とにかくいろいろいるわ。」

おかしい。俺、どうみても必要ないw

2話

おかしい。俺、どうみても必要ないw

「何故俺を？ 必要ないじゃないですか。何か少数精鋭っぽいし。」

「言ったでしょ？ この依頼は一人じゃ無理なの。君の力が必要なんですよ。」

「はあ、本当ですか？」

「本当よ？ 信じなさい。」

意外と疑い深いわね・・・

その後、3日目、正拳突きなどの基本技

4日目、魔力を流しての基本技

5日目・・・師匠との組み手

「全力でかかってきなさい？」

「はい！」

まずは深呼吸。相手の表情、呼吸、予備動作を全神経を集中して観察する。まずは俺が左足を出し、右の正拳。メアリーさんは軽々かわし、左手で俺の右腕を引っ張り、その勢い右肘を俺の胸に入れようとする。俺はそれをギリギリで右にそれてかわす。

冗談じゃない。強すぎる、洒落にならない。

今度はメアリーさんが動く。右手が動いた、と思ったとたんに左手が動き、正確に俺の腹部を捉えた。

俺は思わず悶絶した。

「なかなかいい感じに魔力をコントロールしてるけど・・・まだまだ

だね。あなたは攻撃を防がれることを考えていないわね、それで力ウンターを食らう。次からは気をつけるといいわ。」

「ううう・・・」

そのまま丸一日が過ぎた。俺もだんだんと慣れてきた。

でも、やっぱり強すぎた。一回も勝てない。明日から俺も参加だつてのに・・・

「今日はもういいわ。ほんとに100分の1ぐらいしか教えられなかったけど、明日から仕事よ、今日は早いけどもう寝なさい。」

「はい、おつかれさんした〜。」

大丈夫だろうか。

依頼ってどんなのだろ、今までの修行からして、戦うよね・・・

一人不安を抱える昌也であった・・・

3話

「おはよう、マサヤ君。じゃあ、まずは依頼の説明ね。この街にベビードラゴンといわれる魔物が大量発生してるの。ドラゴンじゃないわよ？でも、集まるとほんと厄介だから君にも手伝って欲しいの。」

「手分けして倒そうということですか？」

「そうよ。それでこれを・・・」

マサヤは携帯？をもらった。これで連絡を取り合っらしい。

「分かりました。じゃあそのベビードラゴンの特徴を。」

「全体的に黒っぽくて、何がなんだかよく分からない生命体よ。一匹だと大して強くないけど、集合するとドラゴンのように大きくなる。それが一番厄介なのよね。」

アレじゃん。 なっちゃうヤツじゃんw

「これから一週間、君と私は聞き込みを行う。だけど、ベビードラゴンの集合が近いようならば今にでも動く。だけど、ソレらしい情報・・・」

「「「「きゃあああ！！！！」」」」

「「「！！」」」

「早すぎよ・・・どうなっているの？まあいいわ。とにかく来て。」

誘われるがままに現場へと駆けつけた。

そこには、ボーリング球ほどの黒っぽい物体が2つ。・・・コレか。

「ちょうどいい。マサヤ君、見てなさい。」

メアリーは足に魔力を流した、きれいな足だろなんて見とれてみると、そこにはもうメアリーはいなかった。

そして、黒い物体が水平に飛んでいた。

メアリーが蹴ったのだ。昌也も早すぎて（集中してみていなかったが）捉えられなかった。

その魔物は、泡のように消えていった。

俺もやってみよう。

幸い魔物は弱い、師匠同様、足に魔力を流し込み・・・一気に距離を詰め、蹴り飛ばした。

まだ死んでないらしく、もがき始めた。そして、分裂した・・・

「マサヤ！早く！そいつらは10体集まると・・・」

周りから魔物が5、6体現れた。一点に集まりグニョグニョと蠢いた。グロイ・・・

そして、人一人ぐらいの大きさになった。ほぼ球体だが。

「くっ！マサヤっ、行くわよ！」

「は、はい！」

メアリー、魔物の目の前に移動し攻撃を繰り返そうとしている。明

らかにあせっている。

魔物から何本もの手が現れた。メアリーはとっさに退いた。

しょうがないわねえ。とつぶやいたのが聞こえた。メアリーの手が燃えていた。魔術である。

一気に距離を詰めて2発、3発、4発と攻撃を繰り返して、退く。

魔物の5分の1が削られた。だが周りから魔物がウニョウニョと寄ってくる。

昌也はその魔物を迎撃する。だが、間に合わない。
10体集結した・・・

一瞬で巨大化した。15メートルはある。黒い竜だ。
メアリーさんは冷静になっていた。

「マサヤ君、私、ちょっとだけ本気出す。」
と言うといきなり雰囲気が変わった。

魔力の量が大幅に増加したのが一目で分かる。

「いくわよ・・・ヴォルカランス。」

目の前に、炎でできた槍が現れた。ソレを手に取り、まず、集合していない魔物を焼き払った。

「すごい・・・」

マサヤは思わずつぶやいた。

そんな中、ドラゴンは分裂しようとしていた。

「させないわよっ！」

槍が一気に10メートルぐらいたままで伸びた。

そして、頭を切り落とした。切り落とされたほうの竜は消えた。
だが、分裂した方は生き残っていた。

「マサヤ！あなたがやりなさい。」

槍を俺に向かって投げてきた。

「大丈夫！君にも火属性があるから！」

槍を受け取ったとき、槍の炎がさらに激しく燃えた。

「！」

今の俺ならやれる。

一気に腹部に接近、黒い手が伸びてきた。

「くっそ！」

槍ではリーチが長すぎる。一回手放し、手と足を駆使し、すべて落とした。

そのとき、手足が光ったように見えた。だが、気にしない。すぐさま槍を拾い、腹に突き刺した。どんどん赤くなっていく。

それを引き抜き、腹の下を潜り抜け、しっぽを切断する。軽い。振り向きざまに、槍が伸びた。意思を反映するらしい。翼を落とす。

「グググオオオオオオ！！！」

もはや竜ではない魔物の頭部めがけて槍を投げつける。

音はなかったが、命中したようだ。頭のほうから泡のように消えていく……

勝った。できた。

槍は消えて、力が抜けた。膝から崩れ落ちる俺を、師匠が支えた。

気づいたら、さっきの民宿だった。寝かされている。

「起きた？」

声が出ない。

「起きたようね。君は魔力の使いすぎでこうなってる。そのうち良くなるわ。」

「ありがとうございます。と首を軽く曲げる。

「それにしても驚いたわ。あなた意外とやるわね。じいさんが目をつけただけある。」

「じいさん？誰だ？」

「まあかなり早く依頼は終わったけど、まずは休むといいわ。そしてたら帰るわ。」

「あ、あと君のことだけど、君は、火、雷、氷、土の属性がある。多いわ。そのうち、使いこなせるようになる。そして、君はおそらく、魔力が多いだけではない。何かある。まだ分からないけどね。」

「もしかして、さっき光ったヤツか？」

「瞼が重くなってきた。もういいや、考えるの面倒くさいわ。俺は意識を手放した。」

「なんなの？この子。もはやセンスの塊よ？」

「じいさん、やっぱりあなたの目は狂っていなかった。私はこの子を絶対連れて帰ります。」

「マサヤの未来を創造しながら、メアリーも眠りについた。」

4 話

「マサヤ君、準備はいい？」

「okです。」

「じゃあ、フィアラルへ行くわよ。」

「はい。」

疲れは全部取れたわけではないが、そのフィアラルというものが楽しみだったので、早く出発することにしてもらった。
ここからだと言約三日かかるらしい。

・ ・ ・ ・

帰り道の砂漠にて

「すみません、この前のようにドアみたいなヤツはださないんですか？」

「あれはとても魔力を使うのよ。あれは2週間ぐらいしないと使えないわ。わざわざ君のために使ったのよ？感謝しなさいよ。」
「言わなきゃ良かった。」

「それにしてもおかしいわね・・・あんなに早くベビードラゴンが集合するなんて・・・」

俺はまったく知らないのなんとも言えないが、とにかくおかしいらしい。

「君の魔力が関係してるのかしら。」

「それじゃあ俺、厄介者じゃないっすかw」

「普通はありえないんだけどね・・・」

ほんとに俺か??

「そろそろお腹がすいたわね。はい、干し肉。」

硬えー、しかもしょっぱい！

「うう・・・」

「ちよつとしっかりしてよ。これからの主食はコレよ?」

これから三日間、こんな生活か・・・

「ふいあたるって何ですかね。」

「フィアラルは、小さいけどギルドよ。でも、皆が強すぎて、誰も入らないんだけどね。」

「それで今回も依頼ってわけですか。」

「ええ、そうよ。でも本当の目的はそこじゃない。君を連れてくることよが本当の目的よ。」

俺？

「フィアラルの長、フォーレルニアっていうんだけど、君の事を見つけて、私に連れてこいって言ったの。」

「そうなんですか。でも俺なんかでいいんすかね。」

「じいさんの目は間違ってたわ。君には素質がある。私にも感じるもの。」

正直、にやけてる。隠せないから下を向く。

「マサヤ君、家族のこととか、友達のこと思い出さない?」

いきなり聞かれて正直驚いた。しかし、思い出すに決まってる。

「実は、君の前にもう一人そういう子がいるのよ。君は覚えてないかもしれないけど、その子は君の事をしっかり覚えてる。」

そういわれた瞬間、頭の中では、たくさんの情報が飛び交っていた。

昔の友達？

そういえば、何か普通の日常で違和感があつたような・・・
親友だったりするのかな？

しかも強いのか？

「名前は何ていいますか？」

「思い出して頂戴ね。ユウトよ。」

ユウト、ユウト、優斗・・・優斗！

神埼優斗だ！

「思い出しました。俺が、あいつを忘れるなんて・・・」
「しょうがないわ。じいさんの魔術はどれも強力よ。」

でも、優斗がいるとだけで、どんなに心強いことか。

「会いたい？」

「もちろんです！」

「じゃあ早く帰りましょう。」

「はい！」

優斗、今何してるんだ？

5 話 影

出発から2日が過ぎ、あと丸一日歩けば到着らしい。

すごい疲れた。足が棒のようとはこのことを言うのだろうか。

メアリーさんの足はほんとに棒のようなのに彼女自身はピンピンしている。こんなアリだろうか。

「はい、干し肉。」

「どうも。」

慣れというものは怖いものだ。あんなにまずかった干し肉が今は何ともない。

それはさておき、遠くに1つの黒い物体が見える、なんだろう。

「マサヤ、魔物が異常な行動を見せた理由が分かったわ・・・」

「えっ、何ですか？」

「あの人影よ。あれが真犯人ね。」

「何ですかアレ。」

「アレはフィアラルと敵対する組織、ガーディアのメンバーよ。」

近づくにつれて、容貌がだんだんと明らかになってくる。

黒いマントを羽織り、フードまで被っている。腰には・・・鞘。

「やる気ね。明らかに。」

謎の人間との距離が10メートルぐらいに縮まった。

そしてこう言った。

「メアリー・ティーフ、その男は誰だ。妙な魔力を感じる。」

「さあね、あなたこそ誰よ。」

男はフードを取った。男だ。

長髪で、整った顔立ちをしている。身長は180くらいか？
剣を抜いた、バチバチと音を立てている。帯電しているようだ。

「マサヤ、ここは私が何とかする。せめて捕まらないようにして。」
え？捕まる？そう思ったとたん、男が魔物を呼んだ。砂漠から手が
伸びている5本だ。

「ケイファンよ。捕まったらお終いよ。」
ウネウネと寄ってくる砂の手。キモ・・・

「さあ、覚悟はいい？男だから容赦しないわよっ！ヴォルカランス
！」

炎の槍が出現。長物に有利な位置をとる。男はさせまいと、距離を
縮める。そして足を斬りつける。メアリーは飛んでよけつつ、頭部
を貫こうとする。男は右によけ、剣を切り上げる。剣の残像からも
稲妻が見える。

「当たるとまずいわね。」

いったん退いて距離をとり、突きを繰り出す。すさまじい速度だが、
男はそれを、避け、剣で受け流し、すべて回避した。

メアリーは舌打ちした。異世界移動の際に、多くの魔力を消費した
ためか、思ったように力が出ない。男はそれでも容赦なく斬撃を繰
り出す。さすがのメアリーも、全力が出せないのでキツイ。

「どうした？そんなものか？」

「くそっ！」

「俺はガーディア第4部隊隊長、グリフ・モーガンだ。」

「知るかつての！」

槍じゃキツイわね・・・メアリーは槍を手放した。槍は消滅した。

そうね、相手は雷・・・ここは土はない、砂ばかり。何か・・・何

かないか？

そうだ！無属性なら・・・

「エルダージャベリン」

無属性、これは金属ではない。この武器がいつ作られたかは、メアリーも知らない。そこまで古いのだ。グリフが近づき剣を振りかぶる、メアリーは見逃さなかった。正確に腹を突いた。男は不意をつかれ、後ろに吹っ飛んだ。血がポタポタと落ちる。致命傷にはならなかったようだ。メアリーは距離を詰め、追撃しようとしたが、男は咄嗟に立ち上がり、後ろに下がった。そして、

「女が・・・、来い！ボルティジ！」

男の前に魔方阵が現れ、そこから人型の猿が現れた。

「なんだ？グリフ。今回はやばいのか？」

「そんなんじゃない、だが、俺一人じゃ無理だ。頼む。」

「あいよ！」

メアリー、顔が面倒くさそうだ。

猿は拳を帯電させた。「いくぜえ、姉ちゃん。」

「死ぬ。糞猿が！」

メアリーらしくない言葉を放ち、猿と距離を詰める。だが、グリフが邪魔をする。非常に厄介だ。せめて、魔力が全快ならば・・・とメアリーは考える。

猿の拳が飛んてくる。槍の柄で受け流し、そのまま攻撃に転じようとするが、グリフが斬り込んでくる。これはダメだと後ろに下がる。「ミリシアの魔物はあなたがやったの？」

「ああ、お前らに早く消えてもらうためにな。だが、その小僧、なかなかやるな。今のうちに息の根を止めておきたい。」

「させないわよ・・・！」

一方、昌也は・・・

「チッ！何だこいつら！」

苦戦していた。蹴っても殴ってもすぐに再生するらしい。砂があつてこそだが。

「もつと、圧倒的な攻撃力が・・・そうだ！」

メアリーが使っていた槍を思い出した。できるか？

手に魔力を集中させてみた。しかし、ダメだ。ん？また光った。何だ？

適当にケイファンを蹴り、手に魔力を更に集中させた。すると、パキパキと音を立て、手に変色していった。鉄・・・？鉄かはどうかまだ分からないが、とにかく硬くなっていた。これなら・・・パン！

ケイファンが弾けた。が、再生した。前より小さくなっている。

「へっ！これなら銅の簞手もいらねえや！」

適当に簞手を投げつけ、小さくなったケイファンを蹴る。すると、もう再生はしなかった。

いける。

これに属性が加われば・・・だが今はしょうがない。やるしかない。魔物は残り4体。魔物は何やら見つめ合い、何かを決断したように中心に集まった。そして、融合した。

「おい・・・またかよ・・・」

大きい、10メートルはある、黒い竜より強そうだ。そしてまた手が無数に出てくるだろう。

両手を硬化させた。魔物の形は手そのまま大きくなった感じがた。一気に間合いを詰める。魔物はグーの形をとった。殴ってみたが少ししか削れない。防御力が格段に上がっている。その削った砂は再生していない。だが、まだまだだ。

これを繰り返していれば勝てる。そう思った。だが、手は、人差し指を俺に向けてきた。咄嗟に退いた。これは危険だ。人差し指から、圧縮された砂が発射された。なんとかよけた。弾は小さいが速い。手は、中指も俺に向けた。まずい。

人差し指と中指から、無数の弾丸が発射された。

6話 砂

無数の弾丸が、俺に向かって飛んできた。まずい、避けきれない。体の前を金属化させたが、全て防げなかった。二、三発貫通した。痛い。

メアリーさんは遠い。やはり俺がやるしかない。メアリーさんも相当ヤバそうだしな。

手は指を上にもけた。弾を装填しているらしい。カチャカチャという音が聞こえる。今だ！足に魔力を流し、手に急接近した。しかし、閉じていた小指に弾かれた。なんだこいつ！？

俺もその魔術とやらが使えたらな。

さて、どうする。敵は砂、発砲出来るし、近距離も十分強い。防御力も場合によって高い。グーになった時、何かできることはないか？目は手のひらの中だろう。

なら、グーになったら背後に回ろう。パーになった時の防御力は分らないが、グーになるということは、元は防御力がそこまで高くない証拠だ。だが、あの手は360度回転するだろう。打てて三発だろうか。穴が空けばイイが。

ずっと沈黙してた俺に手が痺れを切らしたか、手を拳銃のようにした。新しいフォームだ。コレは強力だろう。

弾はデカかった。そのためさっきのよりは遅い。かわして距離を詰めた。

殴りかかろうとした。グーになれっ！

だが、まだグーにはならず、小さな砂の手が伸びてきた。どっかの錬金 師じゃないんだから。

どうやらこれを叩かないとグーになってくれないらしい。仕方ない、

多いけどやろう。

足を取られたらマズイから、まずは足で下の手をける、砂が散る。何時の間にかでが顔の前まで伸びていた。慌てて払いのける。

左足で踏み込んで、左手で手を三つほど壊した。あと七つほどある。腰のあたりから左肩に向けて手が三つある。これは、右の蹴り上げで片付けた。

俺こんなに柔らかかったっけ？

まあいいや。

とにかく残り四つ。本体の指のほうで何かグニョグニョやってる。時間がない！

残り四つ、左手で手を掴み膝で粉碎。右ストレートで左側の手首を打ち抜く。そのまま左の裏拳で右側の手を破壊。あとは適当に殴って片付ける。指がこつちを向いた。

指がドリルになってる！！

ズガアアアン！

あつぶね

間一髪でよけた。穴が空いてるし。

まだ空中でドリルがグイグイグイと音を立てている。今しか無い。俺は手のひらに渾身の右ストレートを入れた。

砂が飛び散った。返り砂？を浴びた。なんか臭いw 穴は空かなかった。だが苦しんでいる、それは

分かる。右の足の裏で同じところを蹴る。まだ穴は空かない。もう一度右手に魔力を込めた。さらに光沢がました。

「うおおおおあー！！」

拳が貫通した。再生してない！

指ドリルの回転力が少なくなっていく。

最後の一撃か？ドリルが俺めがけて飛んでくる。遅すぎ。俺は華麗に避けようとした。だが、いきなり速度をあげた。そんな知恵があったのか！

！

とっさに腕をだしてしまった。ああ、もうだめだ。

アレ？

痛い？痛いだけ？

地面に穴が空いたほどの攻撃だぞ？俺の腕が耐えられるわけ無い。だが腕はある。この金属？はここまで硬いのか！使える。

そのまま力尽きたのか、手はボロボロと崩れる。

終わった、また勝てた。

闘いか、悪くないな。むしろ楽しい。

師匠、ありがとうございます。

7話 雷属性

ありがとうございます。師匠、ここに連れてきてくれて。

・

・

・

あつちで砂が崩れてる・・・勝ったのね、マサヤ君
私もそろそろ終わらせなきゃ。

「ケイファンがやられたか・・・やはり今潰さなければ。」

「あなたの相手はこつちよ！」

槍で猿を牽制し、視線をグリフに向ける。

猿が槍を払いのけ、メアリーに殴りかかる。

「馬鹿ね。アンタじゃ私の相手にもならないわよ。どいてなさい。」

顔面に飛んできた拳を紙一重でかわし、腕をつかみ、引っ張る。そのまま膝で腹を打ちつける

「グフッ！」

猿はうずくまっていたがすぐに立ち直った。

「なめるなよ、姉ちゃん？」

怒ったようだ。雷の量が違う。どうやら本気らしい。

「いくぜグリフ。こいつは殺す。」

「ダメだ、人質にとるんだ。」

やられる前提かい。

メアリーは若干呆れつつも、槍を構えた。腰を低くし、槍の先端をいつでも突き出せるようにする。猿が人差し指と親指で三角形を作った。

「死にな。ボルトミサイル！」

3発の雷のミサイルが飛んできた。

「だから殺さないと言っているだろうが。」

知るか。こんなんで死ぬわけねえだろ。

一発は避け、槍の尻、先の順に回転させて2発のミサイルをそれぞれ撃墜する。1発目のミサイルが返ってきた。ホーミングか。

後ろに反って避け、蹴りで打ち落とす。

メアリーは驚くほど冷静だった。

ミサイルもかなりの速さだったが、そんな短時間で最低限のことを考え、撃破したのだ。

どうしようか、このままだとジリ貧になりかねない。私も何か召喚したいところだけど、魔力が……。男もあまり魔力は残っていないはず、だから積極的に攻撃して来ないんだ。やっぱり、まずは猿を片付けないとダメね。

「やるな、そんならボルトミサイルLV4！」

大きい。二倍はありそうだ。

メアリーも、エルダージャベリンに魔力を流す。

全部で6発。いけるか……

「黒金の閃！」

槍が空を切った。きれいな一文字が現れた。
ドガアアアアン！

ミサイルをすべて撃墜した。

爆風によって、猿が吹っ飛ぶ。グリフが駆けつける。

「もういい、出し惜しみしないで、MAXを出せ。」

「分かてるって、いくぜ！ボルトミサイルLVMAX！！」

今度は20発ぐらいあるかしら。20発ね。

これだけの数を一瞬で把握するのは神業だ。

メアリーの目の前に20発のミサイルが接近する。

黒金の閃では防ぎきれない。

左に走る、もちろん追っかけてくる。

「はっはあ！これで終わりだ！」

仕方がない、魔力が少ないけど、これしかない。

エルダージャベリンが赤熱する。そして少し太くなる。

狙いはミサイル、18発！

メアリーの目が、さらに集中力を増す。

「黒金の焰！」

狙いどおり、18発のミサイルが跡形もなく消える。

「まだ2発残ってるぜえ？ミスか！」

メアリーは無視し、ふうと息を吸う。

手を前に出す。

直径30cm程のブラックホールのようなものが現れる。両手に現れたソレは、残りのミサイルを飲み込んだ。

「何！？どうなってやが・・・グハアッ！」

猿が爆発した。猿の後ろにはメアリーが発生させたものと同じもの。そこからミサイルが出てきたらしい。

「うっう・・・」

猿はもう動けないだろう。なんせ無防備の状態で後ろからミサイルを二発も食らったのだから。

男も、動こうとしない。わざわざ召喚獣に遠距離攻撃させているんだ。奴は近距離専門だろう。

猿の背中は無惨に挟り取られていた。鮮血が砂を黒く染める。

男は歯軋りをしている。やっと力の差に気づいたか、馬鹿め。

「おい、グリフ・・・ダメだ。もう帰らせろ。」

「くっ・・・仕方がない。いつか駆りは返させてやる。それまでしっかり休んでおけ。」

男が何か唱え、魔方陣が猿の元に現れる。そして猿は、光となって消えた。

「次はアンタね。」

男は仕方ないといった表情で剣を抜いた。二本目だと？こいつは二刀流だったのか。

「ボルテイジがやられるとはな、しかもこうもあっさりと。次はこうはいかないと言っている。」

「また返り討ちよ。あんなの出さないほうがマシよ。」

冷たく言い放った。

男は剣に魔力をこめた。後に抜いたほうの剣が紫色に光る。
剣を構える。

次の瞬間、剣がものすごい速さで伸びた。

8話 双剣

剣が伸びた。

「クッ！」

しゃがんで避ける。金髪が頭上でパラパラと舞った。

だが伸びた剣はうまく操れないらしい。だから猿を使ったのか。

後ろに下がったら不利だ。それに、伸びた剣は早くは戻らないらしい。ゆつくりもとの長さに戻っている。伸びる長さは自分で決められるのか？おそらくそうだろう。

左手に伸びる剣、右手には普通の帯電状態の剣。

なるほど、伸びる剣が戻る間、右手で時間を稼ぐ、か。

槍で剣が戻る前にと、素早く突きを繰り出す。だが、剣を駆使してすべてかわされる。

続いて、左手を前に出し、槍の尻で男の左側を大きく叩こうとする。男は隙だらけだといわんばかりの表情で左肩を突いてくる。

メアリーの狙いはそこだった。咄嗟に左肩ごと左手を引き、その勢いで右手を出す。左はから空きなのだ。

槍先の腹で、男を薙ごうとする。だが男はギリギリのところまで受け止め、右手の剣お一闪を繰り出す。槍の柄で防ぐが、体制を崩されてしまった。

まずい、これでは伸びる剣が！

「チッ！」

「喰らえ！」

「喰らわないわよ？」

メアリーは槍の柄で剣を受け止めた。切っ先を細い円柱で受け止めるのだ。ほぼ不可能に近い。だがメアリーはやってのけた。彼女の動体視力、反射神経、集中力には驚かされる。

「何だとお！？」

「あんたじゃ一生かかって私に攻撃を当てられないわ。」

「クソ・・・」

男の目が血走る。この女が！といった表情だ。

ハツタリに決まっているじゃないか。

私だつて避けられない攻撃はある。ただ怒らせなかったのだ。怒つて、判断力を鈍らせる。それがメアリーの狙いだった。コイツはその類だろう。

案の定、引つかかった。

叫びながら剣を伸ばした。上に。そしてその剣を下に振り下ろした。なるほど、こういう使い方もあるのね。だが、叫びながらなんて誰も当たらない。

剣の先は砂に埋もれ、それでも雷を帯びているのがわかるほど輝いている。砂が黒くこげる。

馬鹿ね。メアリーは呆れる。誰でもわかるほどわざとらしく言ったがこつも簡単に引つかかるとは。笑いがこみ上げる。そこまでプライドが高いのだろうか。ガーディアの連中にもプライドはあるんだな。

男は我に返り、今起こした行動に対して後悔していた。本当に当たらなかった。畜生。

プライドも糞もない。本当の馬鹿だった。ごまかすためにああいう口調をしていたのか、馬鹿だからこそその口調か。それは分からない。剣は相当伸びた。これを戻すには長い時間がかかるだろうとメアリーは確信した。

これで最後だ。と槍に魔力を再度流す。槍が細身になり、先が鋭くなった。

槍を持ち替え、右手で尻を、左手を先のほうに添える。投げる気だ。

狙いは腹。さつき傷つけたところだ。大丈夫、私なら寸分の狂いなく命中させられる。

感覚をとき澄まし、目を閉じる。

男はメアリーが目を閉じるのを見逃さなかった。左手の剣を捨てて、一瞬で背後にまわろうとする。

メアリーの背後10メートルの地点にたどり着いた。足に力を入れた。メアリーはそのままだ。

今だ！グリフは猛スピードで近づく。

その瞬間、メアリーが振り向いた。

「！」

槍が投げられた。1mmもズレなかっただろう。男の腹を貫通した。

男は地面に倒れ、どくどくと流れる血を手で押さえ、メアリーに叫んだ。

「何故！気づかれていたというのか！」

「ええ、そうよ。最初から分かっていたわ。」

「心眼とか言うなよ！？」

「見てはいないけど、空気の流れのほうか人の位置を正確に把握できるからね。動き出しのときに、あなたがそこに着くことは分かっていたわ。」

「そんな、馬鹿な・・・」

メアリーは伸びる剣の元に近づき、拾った。すごく重い。よくこの剣を片手で支えていたものだと感じる。この剣のことが気になったメアリーは、男に聞いた。

「この剣、何か他の剣と違うわ。何なの？」

男の姿はなかった。やられた、とメアリーは唇を噛む。まあ、あんなのいつでも倒せると思ったメアリーは、まあいいかと開き直るのだった。

しかしこの剣、剣自体が生きているような錯覚に陥る。やはり何かおかしい。私は剣の事には詳しくないからな。帰ったらガイに聞くとしよう。

9話 親友

二人は戦い終わり、合流した。

「はあ、疲れたわ。扉のことといい、魔力枯渇状態よ。」
「何かスイマセン。」

遠まわしに俺に暴言言ってきた。

「なるほどね、魔力を流すことで体を硬化できる、ね。あのときの違和感はそれだったのか。」

「金属かは分かりませんがとにかく硬いです。」
「今できる？」

そういわれたので魔力を流してみる。しかし、硬化しなかった。

「スイマセン。何か無理みたいっす。」

「まあ、あなたが嘘つくとは思えないし、そのうち見せてもらっわ。」
「

はい。」

「それにしても、ケイファンなんて、どうやって倒したの？」

「硬化させて殴ったり蹴ったりしたら、再生しなくなりました。」

「なるほど、そういう効果もあるわけね。」

「師匠こそ、途中で2対1でしたけど。」

「あんなのハンデよ。それでも楽勝ね。4対1でも勝てたわ。」
マサヤは絶句した。化物か、と言いたくなかった。

「ところでマサヤ君、硬化させたとき、何か気づいたことはなかった？体が軽いとか。」

マサヤは思い出す、体がやけに軽くなってきたことを。

「いつもより格段に体が柔らかくなりましたね。」

メアリーは顔をしかめる。何なのよーと思っっているだろう。

「まあ、帰って硬化させれば、どんな物質からできているかも分かるわ。普通の物質じゃないかもね。」

「あと2時間ぐらいで着くわ。さっきの戦いで結構時間を使ったから、早くしないと日が暮れるわ。」

「暮れたらダメなんですか？」

前の世界では、別に暗くても外にいたが。

「ここには魔物がいるでしょう？」

ああ、そうか。と納得する。

街が見える。ミリシアより大きい。

「ここにフィアラルがあるんですね？」

「そうよ。あと30分ぐらいね。路地裏にあるから分かりにくいけど。」

街の中に入り、あたりを見渡した。ミリシアより広い。

10分程歩いて、大きな道路に出た。路地裏なんて無数にあった。これは面倒くさい。

「ここね。」

メアリーは迷う様子もなく路地裏に入っていた。

少し進むと風変わりのドアがあった。ここか。

マサヤが入ろうとしたとき、メアリーは隣の建物に入っていた。危なかった。

俺も急いで後を追う。

中に入った。割と明るい。ソファーがあり、それを挟むようにテーブルがある。ここで依頼人の話を聞くのだろう。キッチンがあるが、1週間前から放置してあるって感じである。

「結局ここは何屋さんということでしょうか。」

「ジャンルは様々よ。危険な植物の採集、強力な魔物の討伐、場合によっては暗殺なんかもあるわ。」

「暗殺??」

「ターゲットを殺してもいいだけの人間と判断した場合だね。滅多にないわ。浮気や暴力なんか暗殺の対象にはならない。悪徳者や悪い大臣なんかな。」

「誰も何も言わないんですか?」

「依頼人には黙るという条件付で暗殺するから大丈夫よ。」

ほんと、何でもありだな。

?「あつ、メアリーさん早かったね。もう終わり?」

「ええ、ガーディアのせいだけだね。」

・「ん、そこにいるのはじいさんの言ってた高校生。……………
昌也!!!!!!!!!!」

10話 再会

？「昌也！！！！！」

？の人物は尻餅をついている。
恐る恐る近づく・・・

「優斗！！」

尻餅はオーバーだが、親友との再会でそれどころではなかった。
優斗はいまだに起き上がれないでいる。
それでも

「待たせたな。」

「ああ、寂しかったぜ。」

昌也は優斗を起こした。

二人で感動している。メアリーはそれを優しく見守った。

「優斗、お前ここにいつ来た？」

「丁度1年半かな。ここはいいぞ？」

それから二人の思い出話が始まった。

・
・
・
・
・
・

そのころメアリーは

「じいさん？帰ったわ。」

「ああ、メアリーか。早いな。」

「ところで、例の少年。連れてきたわ。」

「おお！少年はどうした。」

「ユウトと話しています。」

「連れて来い。」

「いいけど、昔の親友と盛り上がっているのよ？」

「知るか！はじめに話すのは俺だろうが！連れてこいや〜！」

仕方ないわね・・・

「マサヤ？じいさんが呼んでいるわ。」

「あ、はい。すぐ行きます。じゃあ、後でな。」

「ああ、」

マサヤはそういい残し、じいさんのところへ向かった。

「あの〜スイマセン。」

「よし、正座。そこ。」

「え、あ、ハイ！」

いきなり?!

「私の名前はフォーレルニア・グウィルズ。マスターね。俺は見
の通りの年寄りだから、皆と同じようにじいさんと呼びな。」

「は、はい!どうも。」

「で、君の名前は?」

「岩元昌也です。」

「マサヤか・・・よろしくな!」

「はい!よろしくお願いします。」

「ところで、ユウトとは?」

「はい、ユウトが消えるまで親友でした。」

「なるほど、君にも、彼にも何か異質なものを感じたんだが、どうだ？」

「まだ完全じゃないですが、硬化できます。肌を。」

「面白い。今できるか？」

魔力を流した。温かいものが流れるのを感じる。だが硬化まではいかなかった。

「今は無理のようだな。また今度、じっくりみさせてもらう。それで、いつなったんだ？」

「砂漠でケイファンと戦ったときです。」

「ケイファン？いきなりそんなヤツと戦ったのか？！メアリーは何をしていたんだ！」

「ああ、師匠はガーディア？のメンバーと戦っていました。」

「ガーディアか・・・あとでメアリーに話を聞こう。それにしてもケイファンに勝ったのか。硬化には再生を無効化する効果もあるんだな。 ん？硬化の効果？ マサヤ、俺は天才なようだ。」

俺もそれ考えたんだけど。

「ユウトはどんな戦い方をするんですか？」

「まあ、それはそのうち分かるだろう。彼は珍しい属性を持っている。魔術のにの長けている。これほどの逸材をとらないわけがな

い。」

なるほど、昔からユウトは強かったもんな。

「では、全メンバーを集合させる。それから自己紹介な。」

ユウトによると、自己紹介は質問攻めにあつらしい。がんばろう

見ると、ソファアが3つに増え、1つの椅子がある。そこに俺が座るらしい。

7人？俺には6人に1匹に見える。

「失礼します。」

俺は椅子に腰掛けた。するとじいさんが

「では自己紹介〜」

パチパチパチ〜、皆やってる。ふざけてるのか。

「えっと、岩元昌也です。よろしくお願いします。」

「おきおき、それでは改めて俺はフォーレルニア・グウィルズ。よろしくな。次！」

「神埼優斗。ハイ！」

「メアリー・ティーフよ。ハイ次」

「ロイ・ベルデム。はいパス！」

「ライラ・パルキオプスよ。よろしく。次！」

「ガイ・ランドルフだ。ほい！次」

「イグナム。フェンリルだ。知恵はその馬鹿よりあるから安心しろ。」

ガイ「俺か！殺すぞ！」

イグナム「吼えてろ、馬鹿め。」

ガイ「吼えるのはお前の仕事だー！」

じいさん「やめろい、新人の前で無様だぞ。」

ガイ「うつせージジイ！」

じいさん「あ？今ジジイって言ったな！許されるのはじいさんまでだ！」

メアリー「やめなよ、じいさんもジジイも変わらないわよ。」

ライラ「そうよ。面倒くさい。」

ロイ「新人が固まってるじゃねえか。どうすんだよ。じいさん、さっさと進めろや。」

じいさん「お前らマスターへの口の利き方ぐらい・・・」

フォーレルニアはロイに抑えられていた。

メアリー「じゃあ代わりに私が進めるわ。1通り自己紹介は終わったわね。じゃあ、質問タイムね。皆、準備はいい？」

皆うなづく。じいさんとロイも戻っている。

メアリー「じゃあ、開始！」

全員手を挙げた。どうしよう。

じい「むっ、全員じゃな。まあいい、ここはマスターの俺か・・・」

「

メアリー「前の世界で彼女はいたの？」
いきなりやべええええ！

「え、えと、・・・いません。」

ライラ「うそー、かつこいいじゃんよ。」

俺は思わず下を向く。

メアリー「あははは！照れてる！」

ガイ「この中の男でいちばんかつこいいのは誰だ！！」
なんて質問だ。

男・・・ロイさん、ガイさん、じいさん、ユウトか、全員目が光っている。何でじいさんが光ってんだよ。ロイさんかな。

「ロイさんです。」

ロイ「おっしゃー！2連勝っ！」

どうやらユウトのときも勝ったらしい。

ガイ「あとで覚えとけよ？」

こっちを見ている。スイマセン。

次は、

ライラ「マサヤ君、メアリーと私どっちがいい？」

ふざけんな。俺に答えると？

二人とも20代の美女

メアリーさんは金髪のセミロング、身長は170ぐらい。D E力
ツプぐらい。

ライラさんは長髪の桜色の髪、身長は160ぐらい。C Eカップ
ぐらいである。

究極の選択である。まじめに考えていると、ユウトがこっちを見て
笑っている。他のメンバーもそうだ。爆笑している。

メアリー「冗談よw」

殺していいだろうか。

ロイ「男の中で、誰が一番強そうかな？」
これは

「ガイさんです。」

ロイ「俺のほうが強いのに！」
ガイ「寝言は寝て言えや！」

いつもだが、複雑な心境になる。

イグナム「次だ。剣、銃、どっちの方が好みか聞こう。」
「銃です。」

即答。だって強そうじゃん。

イグナム「だとよ、ロイ。」
ロイ「お前とは気が合いそうだが、今度勝負な。」
ガイ「卑怯にも程があるぜ。」

じいさん「糞ガキどもが、身の程を知れ！まあいい、最後の質問だ。
お前はここに来たことを後悔しているか？」

自身を持って言える

「はい。」

じいさん「よし、この少年をフィアラルへ迎え入れようじゃないか
！拍手」
パチパチ

ここで、俺の新しい生活が始まる。

その夜、
「なあ、ユウト。おまえもこんな感じで入ったのか？」

「ああ、最後の質問で、俺も、はい！って言ってフィアラルの1員になったんだ。」

「そうか、じゃあ改めて、これからよろしくな。」

「まあ、せいぜい俺に追いつけるようにな。ここでは俺が最弱だからな。」

「ならお前なんて楽勝だぜw」

「この野郎やってみろやw」

・
・
・
・

二人はその夜、遅くまで語り合った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0087z/>

異世界の俺の生きる場所

2011年12月3日18時49分発行